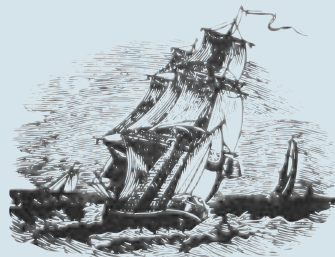


# 羅針盤



## 先入観にとらわれない診療

塩原 哲夫

*Tetsuo Shiohara*

杏林大学医学部皮膚科教授, Visual Dermatology 編集委員

“カルテを書く”という作業は、医者ならごく当たり前の作業である。余りに当たり前過ぎて、何故書かねばならないかとは誰も考えない。しかし“カルテを書く”という作業は医師にとって本当に必要なのだろうか、という疑問が沸く瞬間がある。

それは、ある気功療法士の診療風景を観察した時のことであった。彼は患者を診るとき、一切記録(カルテ)をとらない。患者の訴えに耳を傾けながら、全身をチェックしていく。これは初めての人でも、何回も通院している人でも変わることはない。私はその光景にショックを受け、彼に“何故、カルテを書かないのですか？ これでは次に患者さんがいらした時、どこがどう変わっていたか分からなくなりますか”と尋ねたのである。それに対する彼の答えは、私にカルテを書く意義を考え込ませるに十分なものであった。彼曰く、“私はその場その場の患者さんの状態を正確に把握するのに全力を尽くしており、前に書いたカルテの記載を読んでも間違った先入観を持ちかねません。その時その時で変化する患者さんの状態を正確に把握するのに、そういった先入観はむしろ邪魔になるのです”とのことだった。振り返って我が身を考えた時、再診時前回の状態を正確に覚えている自信がないので、前回のカルテの記載を見て確認しているのである。これはある意味では、プロにあるまじき行為ということになる。皮膚科のプロというのなら、その時々の皮疹の状態を診察するだけで、前回のカルテの記載に頼らなくても、正確な皮疹の経過を把握できなければならないと



いうことになる。

それと似た思いは、今から20年前にも抱いたことがある。あるメーカーから手の栄養クリームの効果を、団地の主婦100人を対象として調べて欲しいという依頼を受けたのである。この判定をするのは私ともう一人の医師であり、使用前後の皮疹の状態をスコア化し、それを比較し有意差をもって軽快していれば商品化するというのである。この仕事

がいかに大変なものであるかは、やってみるまでは実感が沸かなかった。この仕事で要求されるのは、被験者の皮膚の状態を使用前後で全く同じ基準で正確にスコア化できることであり、それができなければ差としては出せないことになる。ほとんどの主婦は皮膚疾患を持つ患者ではないので、ごく軽度の手荒れの人達だけである。しかも出した結果はもう一人の医師の出したものと比べられるのである。我々に与えられたのは、被験者をみてスコア化するだけの時間であり、以前のデータを見て先入観を持って診察することは許されなかった。これは一種の皮膚科医に対する最も過酷な試験と言えた。結果が出て、無事そのクリームの有用性を有意差をもって証明できた時は、本当に安堵の胸をなで下ろしたものであった。

このように、我々は日々の診察で何となくカルテを書き、それを読み先入観を増幅させているが、それは決して診察力の進歩にはつながっていないのかもしれないと思う。本特集号の狙いは、如何に先入観に捕らわれずに、ナイーブな眼で診察することが難しいかを再認識させることにある。